
好きな人

春樹亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きな人

【Nコード】

N5287BA

【作者名】

春樹亮

【あらすじ】

好きな人がいます。

「好き」だと言ったら、その人は、「俺も」と応えてくれました。けれど、私の「好き」と彼の「好き」には、大きな差があるようです。

きつと、ほんの少しの差なんです。

私と彼は同じ人ではない。ただそれだけの差なんです。

けれど、私は彼が好きだから、その差がひどく大きく見えて、時々、無性に泣きたくなるんです。

『好きな人』

好きな人がいます。

「好き」だと言ったら、その人は、「俺も」と応えてくれました。けれど、私の「好き」と彼の「好き」には、大きな差があるようです。

きっと、ほんの少しの差なんです。

私と彼は同じ人ではない。ただそれだけの差なんです。

けれど、私は彼が好きだから、その差がひどく大きく見えて、時々、無性に泣きたくなるんです。

日差しが弱まり、風は寒さを増した。

うるさかったセミの声が聞こえなくなり、木々は赤や黄色に染まっている。

少し離れた席で、楽しそうに笑っている男女のグループを里美はぼんやり眺めていた。

そっと、里美の肩に手がかかる。顔を動かすと、優子が笑いながら言った。

「なんで、あいつらは高校2年にもなって、児童小説の話で盛り上がってるの？しかも、だいぶ前の」

「なんか久しぶりに読んだら面白かったんだって。東也くんが広めたらしいよ」

「へー。そう。『東也くん』ねー。それで、その彼女さんも進められたのかしら？」

「…お前はたぶん好きじゃないだろうからって」

そう言いながら、里美は、視線をグループ、否、東也に戻した。

「あら。それは、ずいぶん言い方だね」

苦笑を浮かべながら、優子も東也のいるグループに視線を向ける。

「私だって、読むのにな」

「そしたら話題も増えるのに…ね？」

優子の少しからかいを含んだ言葉に、里美は素直に頷いた。

自分があの輪の中に入りたいとは思わない。彼らは、どちらかというとクラスを引っ張っていく側の人間だ。そして里美は地味なわけではないけれど、自ら動くことはほとんどない。言わば、引っ張られていく側の人間。

だから、あの輪の中に入った所で、東也と話ができる筈もなく、きつと、居心地が悪いだけ。

そして、東也やその友だちも居心地悪さを感じるだけ。

けれど、あんなに楽しそうな顔を見られるなら、苦手だろうと東也が好きなものをもっとよく知ろうとしたい。里美は、そう思うのだ。

「あゝあ」

しばらく前方を見ていた優子が、呆れたような声を出す。

何かうれしかったことがあったのか、満面の笑みを浮かべ、東也に抱きつく綺麗な子。

東也は小さくため息をつきながらも、その手を振り払おうとはしない。

優子が、親指を立て、あちらに向ける。

「いいの？」

「友だちだし」

はつきりと応えた筈の言葉は弱々しく優子に届いた。

「いい」か「悪い」の二択なら、「悪い」に決まっている。好きな男が、別の女に抱きつかれているのだ。けれど、きつと、そこには恋愛感情などない。

それがわかっていからこそ、何も言えないし、何もできない。

嫉妬すらできないのだ。

「私の前くらい、素直にやきもちやいたら？どうせ本人の前じゃやけないんだから」

「…だって、口に出したら、東也くんの前でも言っちゃう気がするもん」

里美は、腕を曲げ、顔を押し付けた。

涙は出そうになかったが、でも、泣きそうだったから。

不意に、髪が撫でられる。

優子の手だった。身長の高い優子の手は大きい。

「言っちゃえばいいじゃん。あんた、彼女でしょう？」

「違うの」

「は？」

「彼女なんだけど、なんか違うの」

「違うって何が？」

「上手く言えないんだけど、…東也くんと私とは、考えているものが違うの」

「そりゃ、当たり前でしょう？同じ人間じゃないんだから」

「でも、嫌なんだもん」

「…」

「私が好きだっと思うくらい、東也くんにも好きだっと思ってほしい。私がしたいって思うことを、東也くんも同じようにしたいって思っでほしい」

「…そっか」

「わがままだって、わかってるんだよ？無理だって知ってる。けれどね。そう思うの。…バカでしょ？」

里美は首を傾げて、優子を見た。

優子は優しく笑って、首を横に振る。

「バカじゃないよ。みんなそう思ってる」

「…うん」

「でもね、言葉にしなきゃ、なにも伝わらないんだよね？だって、同じ人間じゃ、ないんだから」
「うん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5287ba/>

好きな人

2012年1月14日17時47分発行